

IPM実践指標（トルコギキョウ）

（富山県）

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄(注1)		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
健全苗の育成	病害の発生を予防するため、消毒されている種子を使用する。消毒されていない種子は粉衣等の処理を行う。	1			
	病虫害の発生を予防するため、育苗には、病原菌に汚染されていない培土や資材を用いる。 また、育苗施設や育苗ほ場への害虫侵入を抑制するため、0.4mm目合いの防虫ネットを設置する等物理的防除手段を講じる。	1			
	播種苗と挿し芽苗を別の施設で育苗管理する。 購入苗の場合は、ウイルス感染やアザミウマ類の寄生が無いことを確認し、自苗と分けて育苗管理をする。	1			
施設内への害虫・雑草侵入防止対策	ほ場への雑草種子の持込みや雑草を発生源とする害虫の発生を抑制するため、ほ場及び施設周辺の雑草防除に努める。(注2)	1			
	施設内への害虫の侵入を防止するため、施設開口部に防虫ネットを展張する。	1			
	害虫を捕殺するため、粘着シート等を設置する。	1			
栽培期間中の病虫害・雑草の発生しにくい環境作り	土壌消毒の実施により、病虫害・雑草の発生を効果的に抑える。	1			
	雑草抑制のため、マルチ資材等により畦面等を被覆する。	1			
防除要否の判断	農林水産総合技術センターが発表する発生予察情報や地域予察情報等を積極的に入手し、病虫害の発生予測を確認する。	1			
	ほ場内を見回り、病虫害の発生や被害を把握するとともに、粘着トラップを設置してアザミウマ類の発生状況を確認するなどにより防除の要否、防除時期を判断する。	1			
	前作や近隣の作物、周辺における病虫害の発生状況を確認し、病虫害の発生を予測する。	1			
農薬の使用全般	作物の生育に合わせ、十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる適正な散布方法を検討し、使用量・使用方法を決定する。	1			
	生育初期において病害の多発生が予測される場合には、予防効果のある殺菌剤を散布する。また、浸透性の殺虫剤(粒剤等)を施用することにより害虫の発生を長期間抑制する。	1			
	農薬を使用する場合には、作用機作の異なる農薬をローテーションで使用する。さらに、当該地域で薬剤抵抗性の発達または薬剤耐性菌が確認されている農薬は使用を控える。	1			
ほ場の衛生管理	罹病葉等は放置せず、適切に処分する。特に、ウイルス病等の防除が困難な病害の発病株は、発見次第、早急に抜取り、園外にて土壌中に埋めるなど適切に処分する。	1			
	収穫残さや台刈り後の二番花はミカンキイロアザミウマ等病虫害の発生増殖源となるので、早めに適切に処分し、ほ場内に放置しない。	1			
作業日誌	各作業の実施日、病虫害・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として記録する。	1			
研修会等への参加	県や農業協同組合等が開催するIPM研修会や栽培研修会等に参加する。	1			
合計点数					
対象IPM計					

注1:チェック欄では、未実施の場合は「0」、農薬未使用等当該管理ポイントがチェックの対象外であった場合は「-」と記す。

注2:雑草は、アザミウマ類を始め、アブラムシ類、ハダニ類等の発生源となることから、早めに草刈りを実施する。なお、雑草の刈取り時期によっては、かえって害虫をほ場内へ誘導することになるので、時期については注意する必要がある。また、畦マルチ、防草シート等を活用して除草する。